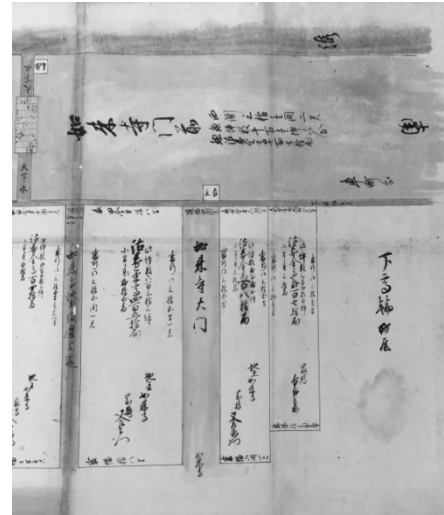


資料館だより

第80号

2017.10.2



「万清楼石井家旧蔵 高輪車町沽券図」より

生まれ変わる歴史の学び舎

— 港区立郷土歴史館の開館準備と資料の再発見・新発見 —

区と区教育委員会が進めている新たな郷土資料館の開設事業は、展示造作や建物の本格的な改修工事が活況を呈する中、6月16日、施設名称が「港区立郷土歴史館」に決まり、開館に向けての準備作業はますます加速しつつあります。

さて開館準備は、展示ケース、解説パネル、解説用デジタル機器、模型やジオラマの製作といったハード的な作業と、展示資料の調査や解説作成のための、研究を主とするソフト的な作業とに分けられます。中でも後者は、地味ではあるものの、展示をはじめとする歴史館運営の根幹をなす重要な作業です。

資料調査は、現在の港郷土資料館が収集した資料のみならず、様々な機関や個人が所蔵している資料も対象とします。とりわけ、近世史や近現代史について言えば、日本全国、さらには海外にまで目を向ける必要があります。

ところで、こうした調査は、これまで気付かなかった資料価値の再発見や、新たな資料の発見に、しばしば私たちを導いてくれます。

例えば、昨年度、「港区文化財総合目録」に新規掲載された「金杉川口河岸町屋絵図面」のように、開館に向けての一連の資料調査の過程で、およそ半世紀ぶりに歴史的価値が再認識された資料があれば、平成26年度に寄贈された「高輪車町沽券図」（万清楼石井家旧蔵資料）のように、図面作成や伝来の背景など、新たな研究課題を私たちに提供してくれた資料もあります。

「港区立郷土歴史館」では、これまで折に触れ紹介してきた資料に、こうした再発見・新発見資料や新たな知見を加え、より精緻な港区の歴史を伝えていくことを目指しています。多くの方々が、新しい歴史の学び舎で、港区の歴史の魅力に触れていただけることを願っています。

は すい 川瀬巴水と港区

さんげだつもん ～三解脱門を描いた2点～

小澤 絵理子
(文化財保護調査員)

川瀬巴水(明治16年～昭和32年(1883～1957))は大正から昭和にかけて活躍した画家で、平成29年(2017)は没後60年にあたります。本名・文治郎。芝露月町(現:新橋五丁目)の糸組物職人の長男に生まれました。幼い頃から絵が好きで、芝神明前(現:大門界限)の絵草紙屋を眺めて育ち、14歳の時、芝神明の青柳墨川ぼくせんという絵師の画塾へ通いました。家業を継ぐため、一旦は絵の道を断念しますが、家督を妹夫婦に譲り、25歳から本格的に絵画の修行を始めました。当時、尾崎紅葉の小説の挿絵などでも人気の画家として活躍していたかぶらぎきよかた 鏑木清方への入門を希望しましたが、年齢を理由に断られ、清方の勧めにより、現在の赤坂一丁目にあった白馬会葵橋洋画研究所で洋画を学びました。しかし、やはり日本画を描きたいという思いが強く、27歳の時に再び清方に頼み込み、入門をゆるされたといいます。清方に与えられた「巴水」という画号は、区内にあったともえ 鞆絵小学校ちなに因むなど、港区とはゆかりの深い人物です。

本格的に画家としての活動を始めてからは、版元の渡邊庄三郎(渡邊木版画店〈現:渡邊木版画美術画舗〉店主)が主唱した「新版画運動」の主要画家の一人として活躍しました。

生涯に600を超える版画作品を制作しており、全国各地を実際に訪れて描いた風景画がその大半を占めています。同じ場所を描いた作品はほとんどないのですが、増上寺三解脱門と大門※がモチーフとなっている作品はそれぞれ2点ずつあります。

三解脱門の前に、雪と風でしなる松、吹雪の中を傘をすぼめて歩く女性—巴水の代表作となった、大正14年(1925)の「東京二十景 芝増上寺」です。この作品は大変な好評を博し、再版を重ねて3000枚まで摺りました。渡邊版は通常、初摺のみの限定版で50～300枚の発行でしたので、これはかなり異例なことでした。

昭和28年の「増上寺の雪」は三解脱門全体を左斜めから見る構図で描いています。傘を持つ3人が同じ方向を見ているのは、路面電車の到着を待っているからでしょう。昭和27年から無形文化財技術保存記録作として制作され、翌年完成しました。再び「三解脱門、雪、傘を持つ人」が描かれたこの作品は、巴水にとっても自身の仕事の集大成という意味を持つ事業となりました。



「東京十二景 芝増上寺」
(当館蔵)



「増上寺の雪」(当館蔵)

※大門を描いた作品は次号でご紹介します。

赤坂へ移築された江戸の遺構

重要文化財「武家屋敷門」について

川上 悠介
(学芸員)

平成28年(2016)9月、港区赤坂にある山脇学園の敷地内に、重要文化財「武家屋敷門」が千葉県から移築されました。この建物は、今回が4回目の移築で、千代田区丸の内、千代田区霞が関、港区白金台、千葉県九十九里町、港区赤坂と様々な場所で大切に使われ続けてきた文化財です。

建物の規模・構造は、桁行(幅)21.8m、梁間4.7m(番所を含めると奥行5.7m)、^{ほんかわらぶき}本瓦葺^{いりも}の入母屋造り。正面両側に片流れの屋根を持つ番所が設けられています。

この門は、現在のKITTE(JPタワー・東京中央郵便局)が建つ千代田区丸の内にあった、老中本多^{みののかみだもと}美濃守忠民の役宅門として建設されました。この屋敷は、天保5年(1834)と文久2年(1862)に火事で焼失したという記録が残されており、門の建築年代は、文久2年以降とされていました。今回の移築工事で実施された部材の分析調査や、炭化した材の使用が確認されたことなどから、文久2年、あるいは天保5年の火災をくぐりぬけてきた部材が使用されている可能性があることが分かりました。

この屋敷は、明治期になると、^{くじょうみちたか}九条道孝邸、司法省、そして現・海城高校の前身である海軍予備校として使用されました。明治32年、海軍予備校の移転と共に「武家屋敷門」は、千代田区霞が関、現在の厚生労働省付近へ移築されます。移築の際に、両端を切り詰め、妻面を入母屋造に改築し、現在残されている姿となりました。

昭和5年(1930)、この門は、実業家藤山雷太の所有となり、芝区白金今里町(現在の白金台一丁目・シェラトン都ホテル敷地)の自宅表門として移築されます。門及び、敷地内の邸宅は、太平洋戦争の空襲を免れますが、昭和20年10月から約6

年間、連合国軍に接收され米軍将校宿舎として利用されました。門は、接收中の昭和22年2月に文化財保護法の前身、国宝保存法により国宝建造物に指定。昭和25年の文化財保護法施行に伴って重要文化財に指定変更となりました。接收解除後、昭和30年代終わりまで、イタリア大使館として使用されたといわれており、昭和39年、敷地は近畿日本鉄道の手に渡り、ホテルが建設されました。その際、「武家屋敷門」は学校法人山脇学園へ寄贈され、山脇学園の臨海学校施設があった千葉県九十九里町へ移築し保存することとなりました。

平成23年の震災をきっかけに、津波から文化財を守るため、港区赤坂への移築検討がはじまります。文化庁との協議の結果、現状変更が許可され、約50年ぶりに東京へ移築されることとなりました。およそ3年をかけた解体・移築工事は、平成28年9月に竣工式をあげることとなりました。

赤坂のビルの谷間に、突如として現れた「武家屋敷門」。国の重要文化財ということで、驚かれた方もいらっしゃるかと思いますが、震災や戦災を潜り抜けた貴重な江戸の遺構です。

【参考文献】山脇学園『重要文化財武家屋敷門修理記』(昭和51年2月)



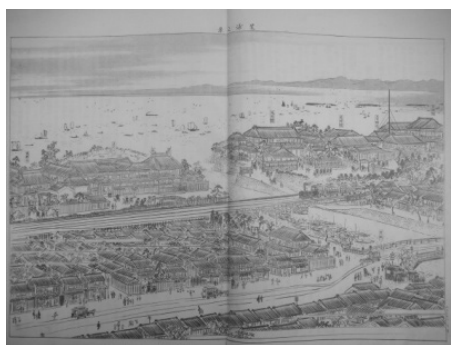
「武家屋敷門」外観(平成29年9月撮影)

明治時代の芝浦

近代初頭の東京の行楽地

小緑 一平
(文化財保護調査員)

現代では工場・倉庫街やそれらを再開発した高層ビル群のイメージが強い芝浦ですが、



明治35年頃の芝浦
(『新撰東京名所図絵』より)

明治時代には房総半島やお台場を臨み、料亭や旅館をも備えた行楽地として栄えていました。

芝浦へ料亭・旅館が多く進出するのは明治10年代ですが、そのきっかけとなったのが海水浴場の設置でした。明治11年(1878)に佐賀県出身の医師・鐘ヶ江晴朝が東京府知事から許可を得て芝金杉新浜町(現：芝浦一丁目)に海水浴場を設置しました。この芝浦の海水浴場は、一説では日本で最初の海水浴場ともいわれています。ただし、当初の目的は行楽ではなく病氣療養や健康増進のためであり、利用法も直接海に入るのではなく海水を沸かした湯に浸かるというものでした。また、上記のような病氣療養や健康増進という目的のため、海水浴場には長期滞在の可能な旅館も併設されていました。

この芝浦の海水浴場が「芝の塩湯」として有名になると、周辺に料理店も集まるようになりました。明治20年代の初めまでに、割烹店の見晴亭、活魚料理の大野屋、鰻屋の松金などができました。

そして明治22年には、本芝四丁目(現：芝五丁目)の鹿島神社脇の鉄道用地内から鉱泉(冷泉)が湧き出しているのが発見されます。この鉱泉の利用を巡って複数の出願者が出て争いとなりますが、最終的には実業家の木村荘平が利用権を獲得

しました。木村は、芝区三田四国町(現：芝三丁目)に開いた牛鍋店「いろは」を東京市内で二十数店舗にまで拡大させ、また東京諸畜売肉商組合や東京家畜市場会社で役員を務める実業家でした。明治27年9月に東京本芝浦鉱泉株式会社を設立した木村は、翌年8月に鉱泉を引いて蒸気で沸かした浴場兼旅館の芝浜館を本芝一丁目32番地(現：芝浦一丁目)に開業します。芝浜館は盛況で、木村はまもなく隣接していた伯爵・後藤象二郎の別荘を譲受して施設の一部とし、さらに明治31年には隣接地に料理店・芝浦館を開店します。明治38年には当時の朝鮮王族の義和宮が芝浜館に長期滞在していることから、芝浜館が相応の格式を有していたこともうかがえます。



田町側からみた芝浦館

また、芝浦の料理店は当初芝神明の芸者を招いていましたが、送迎の不便や神明の料理店との芸者の奪い合いの問題から料理店仲間で地元芸妓屋をつくる案が持ち上がり、明治35年5月に芸妓屋松崎が営業を開始します。これが、芝浦花街の嚆矢となりました。

人々はこのように施設の充実した行楽地となった芝浦で、春は潮干狩り、夏は納涼・花火、秋は月見などを楽しみました。しかし、芝浦の行楽地としての歴史は短命に終わります。明治末から沿岸の埋立が進むと、最大の売り物であった海岸線の景観が失われ、盛況を誇った料理店・旅館も軒並み廃業してしまいます。ただ芝浦花街だけは、その後埋立地に進出した工場・倉庫業の関係者を顧客として繁栄しました。

もんよう さわれる縄文土器の文様

じょうもんげんだい

つくってみよう縄文原体

岡本 康則
(埋蔵文化財調査員)

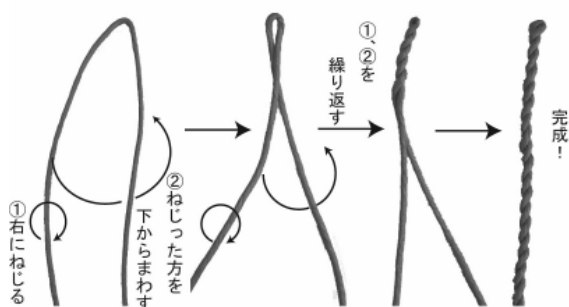
港郷土資料館では、西久保八幡貝塚から出土した縄文土器に直接さわることができます。この土器は、今から約3,500年前の縄文時代後期に作られた土器です。土器の表面を観察すると、楕円形のくぼみが規則的に並んでいることがわかります。



さわれる縄文土器

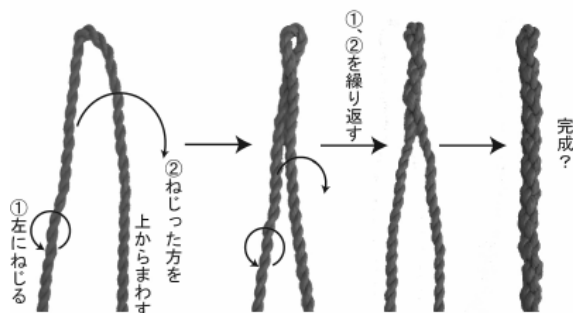
この文様（土器の模様）は、縄を転がしてつけたもので、この文様をつけるための縄を「縄文原体」と呼びます。では、さわれる縄文土器の縄文原体は、どのようなモノだったのでしょうか。

紙ひもを使って再現してみます。この紙ひもを下の写真のようによっていくと、1本の縄が出来上がります。この1回よった縄を1段の縄と呼びます。

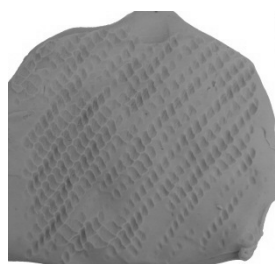


1段の縄の作り方

この1段の縄では、さわれる縄文土器のように楕円形のくぼみがつかないため、この縄を半分に折るか、2本組み合わせて、次の写真のように、もう1度よっていきます。これを、2段の縄と呼びます。



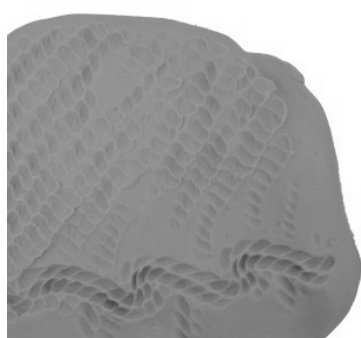
2段の縄の作り方



2段の縄の文様



さわれる縄文土器の文様



止め結び後の文様

では、完成した縄文原体で文様をつけてみましょう。左の写真のように、楕円形のくぼみがあるきれいな縄文をつけることが出来ましたが、何かが足りません。下の写真と見比べると、～字の文様がついていないことがわかります。そのため、縄の端を止め結びにして、結び目を作ると、一番下の写真のようにさわれる縄文土器と同じ文様がつきました。

縄文土器の文様は、縄以外に棒状やへら状の道具を使ったり、粘土紐を貼り付けたりと様々あります。どんな道具で文様がつけられたのか、資料館の縄文土器を観察して、考えてみませんか？

夏休み体験ミュージアム

「縄文人の暮らしを体験しよう！」

—編布（あんぎん）作りと火おこし体験—

杉本 絵美

(文化財保護調査員)

今年度の夏休み体験ミュージアムは「縄文人の暮らしを体験しよう！」をテーマに、東京都埋蔵文化財センターとの共催事業として行いました。

夏休みも終わりに近づいた8月22日、親子合わせて25名の参加者が多摩市にある東京都埋蔵文化財センターに集まり、編布作りと火おこし体験を中心に縄文時代の衣食住について学びました。

東京都埋蔵文化財センターには縄文時代の遺跡を保存し、当時の様子を再現した庭園があります。まずは、その遺跡庭園「縄文の村」内に復元された縄文時代の竪穴住居や再現された縄文時代の森を見学し、縄文時代の暮らしについて学びました。

縄文の村を散策した後は、様々な縄文人の暮らしを体験します。復元された縄文時代の衣服を試着して写真を撮ったり、石皿を使ってドングリをすり潰したりしました。

火おこし体験では、もみぎり式と舞ぎり式の両方に挑戦しました。もみぎり式は縄文時代の火お



火おこし体験の様子

こしと考えられている、火きり杵を両手で回す方法で、舞ぎり式は紐を通した横木とはずみ車を使って火きり杵を回転させる、もみぎり式より新しい方法です。舞ぎり式では苦勞しながらも全員火をおこすことに成功しましたが、もみぎり式では煙すら出せず、縄文人の苦勞を体感しました。

ひと通り縄文人の暮らしを体験した後、いよいよ今回のメインイベントである編布作りにチャレンジです。実は縄文人がどんな衣服を着ていたのか、はっきりわかっていません。植物繊維から作

られた衣服は土の中で腐ってしまい、残りにくいからです。しかし、土偶の服装の表現や、遺跡から発見された布によって、縄文時代には布を衣服としていたと考えられています。

また、土器の底部に残った敷物の痕や、発見された布を調べたところ、縄文時代の布は織物ではなく編物であり、越後アンギンといわれる布の作り方とほぼ同じであることがわかりました。緯糸に2本の経糸を絡ませて編む、もじり編みという編み方で作られ、今でもスダレなどにその編み方を見ることができます。

今回は越後アンギンと同じ編み方で、コースターを作りました。経糸を掛ける横木（ケタ）が取り付けられた編機と、経糸を巻きつけておく重りを兼ねた糸巻き（コモヅチ）を使います。編み方はちょっと複雑で、小学生には難しいところもありましたが、全員頑張って編布を完成させました。

出来上がった編布は思いのほかしかりとして丈夫です。今回は一辺が約12cmの布をおよそ



編布作りの様子

2時間ほどで編み上げましたが、遺跡から発見された編布にはもっと細かな編目のものもあり、大人が着る衣服を作るのにいったいどれだけの時間と手間がかかったことでしょう。

参加者からは「難しかったけど楽しかった」「昔の人はすごいと思った」などの声がありました。これからも「さわる・作る・動かす」といった体験を通して郷土の歴史や文化を学ぶ機会を作っていきたいと思います。

夏休み学習会

魚から見た海、人から見た海

山根 洋子

(文化財保護調査員)

港郷土資料館と東京海洋大学マリンサイエンスミュージアムの連携事業である夏休み学習会は、今年で13回目を迎えました。この学習会では〈東京湾 自然と人〉を基調として、毎年東京湾に関するさまざまな事柄を学んでいます。

今年『魚から見た海、人から見た海』を全体のテーマとし、8月9日と10日の2日間に渡り実施しました。参加者は区内の小学校に通う小学4～6年生とその保護者の方々です。

初日は東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム館長の河野博教授のもと「透明骨格標本で東京湾の魚の形態と生態を知ろう！」が行われました。学習会の会場は大学の講義で使われる実験室。人数分の顕微鏡やシャーレ、スライドグラスが用意され、さながら大学生が受ける講義です。まず、河野先生のお話から、①海の中の生きものは、「食べる－食べられる」でつながっている。②大元は植物プランクトンで「養分(栄養塩)」が必要。③養分(栄養塩)は、私たちの生活と関係している。ということ学びました。

そして、顕微鏡の使い方をお手伝いの大学生たちに教えてもらいながら、東京海洋大学近くの運河で採取された海水を顕微鏡で見てみました。慣れない顕微鏡に緊張しながらも、皆一生懸命ピントを合わせ、植物プランクトン、そして動物プランクトンを探して観察、図鑑を参考にプランクトンの種類を調べ、どんな姿をしているかをスケッチしました。その後はいよいよ透明骨格標本の登場です。マハゼとコノシロの稚魚の透明骨格標本を顕微鏡で観察し、解剖してお腹の中身を見ました。マハゼのお腹の中身はわかりにくかったようですが、コノシロのお腹の中からは黒いツブツブ＝動物プランクトンがたくさん出てきました。透明骨格標本の観

察・解剖を行ったことで、魚が動物プランクトンを食べているという、食物連鎖の一端を実感できたのではないのでしょうか。

2日目は港郷土資料館で「東京湾、魚の捕り方と道具を知ろう！」をテーマに、神奈川大学の安室知教授にお話していただきました。

豊かな漁場である日本周辺の海において、東京湾も例外ではなく、汽水域に生息する魚を含め多種が見られる豊かな海であること、ただし東京湾には大きな魚の群れはいないこと、そのため東京湾では1種だけの漁では成り立たず、一軒の家で色々な種類の漁を行っていることなどを先生のお話から知ることができました。また、東京湾の漁業で使う漁具について学習した後、港郷土資料館所蔵の漁具を間近で見たり触ったりしながら、漁具の名前や何を捕る道具かななどを教えていただき、アナゴ、ウナギ、フグ、サヨリ、イカ、エビなど、漁の対象となっていた種も学びました。

最後に、港郷土資料館所蔵の漁具にもあるアナゴ筒をペットボトルで作りました。ペットボトルは小さいため、アナゴ捕りは無理ですが、ドジョウくらいの小さな魚であれば捕れるそうです。ただし、魚を捕るため水辺に近づく際は必ず大人と一緒に、という注意も受けました。

今回の夏休み学習会では、東京湾に生息する生き物同士の関係や、生き物と私たちの暮らしの関係、東京湾の漁業の特徴を学びました。港郷土資料館は来年度、白金台に移転し「港区立郷土歴史館」として生まれ変わりますが、移転先では東京湾の環境や生き物、港区沿岸の漁業についての展示も行います。夏休み学習会と共に郷土歴史館での展示が、港区の目前に広がる東京湾の豊かな自然環境について考える機会になればと思います。

事業予定 (平成29年10月～)

★資料館講座「尾崎紅葉と港区」を開催します。

本講座では、港区にゆかりの深い文学者で、港区の近代文化史、日本近代文学のルーツを考える上でも非常に重要な人物である尾崎紅葉について多角的に学びます。

日時：12月9日(土) 13:00～16:30

会場：三田図書館3階 集会室

定員：30名(要事前申込み)

申込方法などの詳細については、『広報みなと』11月11日号、当館HPに掲載します。

コーナー展

・「平成29年度新指定文化財展」

11月17日(金)～12月20日(水)

講座など

・親子学習会「日本庭園にふれ、ミニミニ石庭(枯山水)を作ろう」(全2回) 11月12日・26日

・土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう！」 12月2日・平成30年3月10日

- 各事業の詳細については、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧ください。
- 当館の刊行物の一覧がホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室のほか、郵送での販売も受け付けています。詳しくは、当館までお問い合わせください。

事業報告 (平成29年3月～9月)

- ①コーナー展「港区遺跡展—最近の発掘調査から—」 平成28年12月16日～5月17日
- ②土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう！」 3月4日
- ③親子学習会「日本庭園にふれ、ミニミニ石庭(枯山水)を作ろう」(全2回) 3月11日・25日
- ④資料館講座「江戸湾の景観 - 品川宿辺りから汐留地区周辺まで -」 3月25日
- ⑤港郷土資料館・東京海洋大学マリンサイエンスミュージアム連携事業
夏休み学習会「～東京湾 自然と人～ 魚から見た海、人から見た海」(全2回) 8月9日・10日
- ⑥夏休み体験ミュージアム「縄文人の暮らしを体験しよう！
—編布(あんぎん)作りと火おこし体験—」 8月22日

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00

休館日 日曜日・祝日・第3木曜日・年末年始
特別整理期間

(臨時休館などはHP等で随時お知らせします)

入館料 無料



『資料館だより』第80号

平成29年(2017)10月2日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 29153-7541